

鳥取大学農学部附属鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター一年報

(第10号)

2016年版

'16 ANNUAL REPORTS
TOTTORI UNIVERSITY AVIAN ZOOONOSIS RESEARCH CENTER



鳥取大学農学部
附属鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター

AVIAN ZOOONOSIS RESEARCH CENTER

(AZRC)

目 次

1. ご挨拶	1
2. 人員構成と各研究部門における研究内容	2
(1) 病態学研究部門	2
(2) 疾病管理学研究部門	2
(3) 分子疫学研究部門	3
3. 研究活動	5
(1) 病態学研究部門	5
著 書	5
原著論文	5
学会発表	6
(2) 疾病管理学研究部門	7
著 書	7
原著論文	8
総 説	8
学会発表	9
(3) 分子疫学研究部門	9
著 書	9
原著論文	9
総 説	10
学会発表	10
4. その他の研究活動	12
(1) 国際共同研究・共同調査	12
5. 広報活動	12
(1) パンフレット等	12
(2) 講演等	13
(3) 新聞雑誌等掲載	14
(4) TV取材出演等	17
6. 社会貢献	17

1. ご挨拶

センター長 伊藤 壽啓

平成28年11月、青森市内のアヒル飼育農場で高病原性鳥インフルエンザが発生しました。今回は、平成27年1月の佐賀県下での発生以来、1年10か月ぶりの国内発生となりましたが、今までになく、シーズンのかなり早い時期に、全国各地で数多くの野鳥の死体や糞便から、ウイルスが検出されたことが注目されました。

本センターは平成17年の設立以来、環境省からの協力要請を受けて、毎シーズン、野鳥における高病原性鳥インフルエンザの確定診断機関として、検査協力を行ってきています。また昨年11月及び12月の秋田と名古屋の動物園での発生時にも、センター教員が環境省の現地緊急調査チームに参加し、科学的な立場から助言や調査協力を行いました。

さらに農林水産省とも連携して、センター教員が発生農場における疫学調査チームのメンバーとして参加し、感染経路究明のための疫学サンプルの解析を実施したり、あるいは同省の食料・農業・農村政策審議会家畜衛生部会や環境省の鳥インフルエンザ専門家会合のメンバーとして、専門的な立場から本病の国内防疫対策に対する助言・指導等を継続的に行ってきております。

また国外においても、日本医療研究開発機構（AMED）のもとで、感染症研究国際展開戦略プログラム（J-GRID）「ベトナムにおける包括的な鳥インフルエンザ研究」を継続実施しております。

本センターはこれからも我が国唯一の鳥類感染症の専門研究機関として、鳥由来人獣共通感染症の制圧に向け、スタッフ一同尚一層精進して参りたいと存じます。引き続き皆様方のご支援・ご協力を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

2. 人員構成と各研究部門における研究内容

(1) 病態学研究部門

- ・野鳥の生息状況・飛翔路調査
- ・野鳥の病原体保有状況調査
- ・異種動物間伝播機序の研究

教授 山口 剛士（平成19年6月1日着任～現在）

「新興・再興感染症研究拠点形成プログラム」(海外研究拠点を活用した新規研究課題)における研究課題「ベトナムにおける鳥インフルエンザ侵淫実態調査と流行予測」に参加している。人獣共通感染症の伝播と拡散における野生鳥類の果たす役割について研究を行っている。

准教授 笛吹 達史（平成20年4月着任～平成22年3月助教、

平成22年4月～平成28年3月講師、平成28年4月～現在）

インフルエンザウイルスについて、ウイルス感染動物における免疫誘導機構、鳥種・動物種による病原性の違いに関わる宿主要因をテーマに研究を行っている。鳥類から哺乳類への伝播機序の解明を目指す。また、ベトナムにおける鳥インフルエンザ侵淫実態調査と流行予測に参加。

特任教授 小野 悦郎（平成17年4月～平成19年3月専任教授、平成19年4月～現在）

「新興・再興感染症研究拠点形成プログラム」(海外研究拠点を活用した新規研究課題)における研究課題「ベトナムにおける鳥インフルエンザ侵淫実態調査と流行予測」に業務主任者として参加している。また、鳥インフルエンザ抵抗性動物の開発研究を行っている。

(2) 疾病管理学研究部門

- ・病原性獲得変異の研究
- ・病原微生物の感受性研究
- ・新規抗微生物活性物質の研究

教授 村瀬 敏之（平成17年4月～平成18年3月助教授、平成18年4月～現在）

「新興・再興感染症研究拠点形成プログラム」(海外研究拠点を活用した新規研究課題)における研究課題「ベトナムにおける鳥インフルエンザ侵淫実態調査と流行予測」に

分担研究者として参加している。また、鶏卵鶏肉を汚染するサルモネラの生態、病原性および薬剤感受性に関する調査研究を行っている。

准教授 尾崎 弘一（平成19年7月着任～平成24年12月助教、平成25年1月～現在）

高病原性鳥インフルエンザウイルスに対するワクチン開発を行っている。また、ウイルスタンパクに対する抗体を応用して CNT バイオセンサーの開発、広範囲なウイルス増殖抑制活性を持つ抗体の探索とその応用、分子レベルでの抑制メカニズムを追っている。

特任教授 大槻 公一（平成17年4月～平成18年3月教授、センター長、平成18年4月～現在）

「新興・再興感染症に関する海外研究拠点形成プログラム」(文部科学省)により長崎大学熱帯医学研究所がベトナムに形成した拠点において、研究協力者として、同国の野鳥の鳥インフルエンザウイルス汚染状況を調査している。また、抗ウイルス性を持つ新素材「加工ドロマイト」の開発研究を行っている。

(3)分子疫学研究部門

- ・分子疫学情報のデータベース化
- ・遺伝情報交換ネットワークの構築

教授 伊藤 壽啓（平成17年4月～現在、平成18年4月～現在、センター長）

鳥由来人獣共通感染症としての鳥インフルエンザを主な研究対象として、人の新型インフルエンザウイルス出現予測のための宿主域制限因子の解明や、国内に飛来する渡り鳥を中心とした野鳥のウイルス保有状況調査、野生水禽由来インフルエンザウイルスの鶏に対する病原性獲得機構の解明等の研究を実施している。

准教授 伊藤 啓史（平成17年4月～現在）

鳥インフルエンザウイルスおよびニューカッスル病ウイルスの宿主域、病原性に関する研究を行っている。また、各種機関や企業との連携、共同研究により野鳥の鳥インフルエンザウイルス保有状況の調査や抗鳥インフルエンザウイルス素材、製品に関する研究を行っている。

講師 曾田 公輔（平成23年6月着任～平成25年3月専任助教、平成25年4月～現在）

高病原性鳥インフルエンザウイルスの各種野鳥および家禽に対する病原性とその疫学的意義を明らかにすると共に、インフルエンザウイルスの宿主である水禽からニワトリに

ウイルスが伝播するために関与する分子基盤の解明を試みている。また、ベトナムの家禽における鳥インフルエンザウイルスサーベイランスを継続的に行っている。

(平成29年3月31日現在)

3. 研究活動

(1) 病態学研究部門

著 書

1) 山口剛士: 第 1 章 種と自然史(分担訳). pp. 13-22, 第 2 章 解剖学と生理学(監訳). pp. 23-38, 第 6 章 基礎的な手技(監訳). pp. 75-85, 第 7 章 臨床病理と剖検(監訳). pp. 87-116, 第 13 章 全身感染症(監訳). pp. 195-211, 第 14 章 呼吸器疾患. pp. 225-223, 第 15 章 消化器疾患(分担訳). pp. 225-236, 第 17 章 行動及び行動障害. pp. 253-273, *オウムインコ類マニュアル* 第 2 版, 学窓社, 東京, 2016 年.

原著論文

1) Iwamori N, Tominaga K, Sato T, Riehle K, Iwamori T, Ohkawa Y, Coarfa C, Ono E, and Matzuk MM: MRG15 is required for pre-mRNA splicing and spermatogenesis. *Proc Natl Acad Sci USA*, 113(37), E5408-E5415, 2016.

2) Herédi J, Berkó AM, Jankovics F, Iwamori T, Iwamori N, Ono E, Horváth S, Kis Z, Toldi J, Vécsei L, and Gellért L: Astrocytic and neuronal localization of kynurenine aminotransferase-2 in the adult mouse brain. *Brain Struct Funct*, doi: 10.1007/s00429-016-1299-5, 2016.

3) Saito M, Yamamoto S, Ozaki K, Tomioka Y, Suyama H, Morimatsu M, Nishijima K, Yoshida S, and Ono E: A soluble form of Siglec-9 provides a resistance against Group B Streptococcus (GBS) infection in transgenic mice. *Microb Pathog*, 99, 106-110, 2016.

4) Fujimoto Y, Tomioka Y, Takakuwa H, Uechi G, Yabuta T, Ozaki K, Suyama H, Yamamoto S, Morimatsu M, Le QM, Yamashiro T, Ito T, Otsuki K, and Ono E: Cross-protective potential of anti-nucleoprotein human monoclonal antibodies against lethal influenza A virus infection. *J Gen Virol*, 97 (9), 2104-2116, 2016.

5) Fujimoto Y, Ito H, Ono E, Kawaoka Y, and Ito T: The low-pH resistance of neuraminidase is essential for the replication of influenza A virus in duck

intestine following infection via the oral route. *J Virol*, 90 (8), 4127-4132, 2016.

6) Fukui D, Nakamura M, Yamaguchi T, Takenaka M, Murakami M, Yanai T, Fukushi H, Yanagida K, Bando G, Matsuno K, Nagano M, and Tsubota T: An Epizootic of Emerging Novel Avian Pox in Carrion Crows (*Corvus Corone*) and Large-Billed Crows (*Corvus Macrorhynchos*) in Japan. *J Wildl Dis*, 52(2), 230-41, 2016.

7) Iwamori T, Iwamori N, Matsumoto M, Ono E, and Matzuk MM: Identification of KIAA1210 as a novel X-chromosome-linked protein that localizes to the acrosome and associates with the ectoplasmic specialization in testes. *Biol Reprod*, 96(2), 469-477, 2017.

8) Usui T, Soda K, Tomioka Y, Ito H, Yabuta T, Takakuwa H, Otsuki K, Ito T, and Yamaguchi T: Characterization of clade 2.3.4.4 H5N8 highly pathogenic avian influenza viruses from wild birds possessing atypical hemagglutinin polybasic cleavage sites. *Virus Genes*, 53(1), 44-51, 2017.

学会発表

1) 小野悦郎: マイクロミニピッグを用いた次世代幹細胞移植再生治療モデルシステムの構築. 第41回日本実験動物技術者協会北海道支部総会, 2016年4月23日, 札幌市.

2) 笛吹達史, 富岡幸子, 曾田公輔, 伊藤啓史, 伊藤壽啓, 山口剛士: 高病原性鳥インフルエンザ国内発生においてチョウセンイタチ (*Mustela sibirica*) は家禽への感染源になりえる. 第31回中国四国ウイルス研究会, 2016年7月, 鳥取市.

3) Saito M, Yamamoto S, Ozaki K, Tomioka Y, Suyama H, Morimatsu M, Nishijima K, Yoshida S, and Ono E: A soluble form of Siglec-9 provides a resistance against Group B Streptococcus (GBS) infection in transgenic mice. 2016 華南実験動物科学国際シンポジウム, 2016年8月23日, 広州市.

4) Tomioka Y, Fujimoto Y, Ozaki K, Yamamoto S, Suyama H, Morimatsu M,

Takeuchi T, Ito T, and Ono E: Pancreatic exocrine defects in transgenic mice expressing a soluble form of human nectin-2. 2016 華南実験動物科学国際シンポジウム, 2016年8月23日, 広州市.

5) Fujimoto Y, Tomioka Y, Ozaki K, Takakuwa H, Suyama H, Yamamoto S, Morimatsu M, Uede T, and Ono E: Comparison of the antiviral potential among soluble forms of herpes simplex virus type-2 glycoprotein D receptors, herpes virus entry mediator A, nectin-1 and nectin-2, in transgenic mice. 2016 華南実験動物科学国際シンポジウム, 2016年8月23日, 広州市.

6) Fujimoto Y, Tomioka Y, Takakuwa H, Uechi G, Yabuta T, Ozaki K, Suyama H, Yamamoto S, Morimatsu M, Le QM, Yamashiro T, Ito T, Otsuki K, and Ono E: Anti-nucleocapsid protein antibody is sufficient to confer resistance to lethal infection with influenza A viruses of several subtypes in transgenic mice. 2016 華南実験動物科学国際シンポジウム, 2016年8月23日, 広州市.

7) 富岡幸子, 藤本佳万, 中井寛治, 尾崎絹代, 山本沙代, 陶山晴香, 森松正美, 竹内崇師, 伊藤壽啓, 小野悦郎: 可溶型ヒトネクチン-2 発現トランスジェニックマウスに見られた膵外分泌異常. 第159回日本獣医学会学術集会, 2016年9月7日, 藤沢市.

8) 笛吹達史, 富岡幸子, 曾田公輔, 伊藤啓史, 伊藤壽啓, 山口剛士: 高病原性鳥インフルエンザ国内発生におけるチョウセンイタチ (*Mustela sibirica*) の家禽への感染源としての可能性, 第159回日本獣医学会学術集会, 2016年9月, 藤沢市.

9) 小野悦郎: 動物の福祉と動物実験の再現性. 第29回日本動物実験代替法学会, 2016年11月18日, 福岡市.

(2) 疾病管理学研究部門

著 書

1) 大槻公一: 2章. B. 鳥インフルエンザ H7N9 およびそのほかの亜型ウイルス. *インフルエンザ診療ガイド 2016-2017*, 菅谷憲夫編著, 日本医事新報社, 東京, 2016年.

原著論文

- 1) 松本高明, 大槻公一, 谷口明, 山崎勉, 織田慶子, 萩原敏且: 高濃度溶存酸素 (WOX) 飲用による動脈血酸素飽和度 (SpO₂) への効果. *Prog Med*, 36, 127-130, 2016.
- 2) Fujimoto Y, Tomioka Y, Takakuwa H, Uechi G, Yabuta T, Ozaki K, Suyama H, Yamamoto S, Morimatsu M, Le QM, Yamashiro T, Ito T, Otsuki K, and Ono E: Cross-protective potential of anti-nucleoprotein human monoclonal antibodies against lethal influenza A virus infection. *J Gen Virol*, 97, 2104-2116, 2016.
- 3) Shichinohe S, Itoh Y, Nakayama M, Ozaki H, Soda K, Ishigaki H, Okamatsu M, Sakoda Y, Kida H, and Ogasawara K: Comparison of pathogenicities of H7 avian influenza viruses via intranasal and conjunctival inoculation in cynomolgus macaques. *Virology*, 493, 31-8, 2016.
- 4) Nakayama M, Ozaki H, Itoh Y, Soda K, Ishigaki H, Okamatsu M, Sakoda Y, Park CH, Tsuchiya H, Kida H, and Ogasawara K: Vaccination against H9N2 avian influenza virus reduces bronchus-associated lymphoid tissue formation in cynomolgus macaques after intranasal virus challenge infection. *Pathol Int*, 66(12), 678-686, 2016.

総 説

- 1) 大槻公一: 2015 年秋以降の鳥インフルエンザ発生状況. *鶏の研究*, 91(2), 16-21, 2016 年.
- 2) 大槻公一: 鳥インフルエンザの発生状況と其の対策. *日防菌防黴会誌*, 44(4), 179-189, 2016 年.
- 3) 大槻公一: 鳥インフルエンザの現状とその病態. *呼吸器内科*, 29(5), 428-433, 2016 年.
- 4) 大槻公一, 高桑弘樹, 藪田淑予, 雨森貴郁: 世界に発生が広がっている鳥インフルエンザ. *京産大先端科学技術研究所所報*, No 15, 43-61, 2016 年.

学会発表

- 1) 尾崎弘一, 関原雄大, 村瀬敏之: 鶏飼養農場からの大腸菌バクテリオファージの分離と性状解析. 第159回日本獣医学会学術集会, 2016年9月 藤沢市.

(3)分子疫学研究部門

著 書

- 1) 伊藤壽啓: 2.馬インフルエンザ. *動物感染症学*, 初版, 福士秀人編, 近代出版, 東京, 2016年.
- 2) 伊藤壽啓: 3.豚インフルエンザ. *動物感染症学*, 初版, 福士秀人編, 近代出版, 東京, 2016年.
- 3) 伊藤啓史: 第7章インフルエザ. *獣医公衆衛生学実習*, p109~112, 獣医公衆衛生学教育研修協議会編, 学窓社, 東京, 2016年.

原著論文

- 1) Shichinohe S, Itoh Y, Nakayama M, Ozaki H, Soda K, Ishigaki H, Okamatsu M, Sakoda Y, Kida H, and Ogasawara K: Comparison of pathogenicities of H7 avian influenza viruses via intranasal and conjunctival inoculation in cynomolgus macaques. *Virology*, 493, 31-8, 2016.
- 2) Fujimoto Y, Tomioka Y, Takakuwa T, Uechi G, Yabuta T, Ozaki K, Suyama H, Yamamoto S, Morimatsu M, Le QM, Yamashiro T, Ito T, Otsuki K, and Ono E: Cross-protective potential of anti-nucleoprotein human monoclonal antibodies against lethal influenza A virus infection. *J Gen Virol*, 97, 1-13, 2016.
- 3) Yamamoto E, Ito T, and Ito H: Completion of full length genome sequence of novel avian paramyxovirus strain APMV/Shimane67 isolated from migratory wild geese in Japan. *J Vet Med Sci*, 78(10), 1583-1594, 2016.
- 4) Nakayama M, Ozaki H, Itoh Y, Soda K, Ishigaki H, Okamatsu M, Sakoda

Y, Park CH, Tsuchiya H, Kida H, and Ogasawara K: Vaccination against H9N2 avian influenza virus reduces bronchus-associated lymphoid tissue formation in cynomolgus macaques after intranasal virus challenge infection. *Pathol Int*, 66(12), 678-686, 2016.

5) El-Bahrawy A, Zaid A, Sunden Y, Sakurai M, Ito H, Ito T, and Morita T: Pathogenesis of Renal Lesions in Chickens after Experimental Infection with 9a5b Newcastle Disease Virus Mutant Isolate. *Vet. Pathol*, 54(1), 94-98, 2016.

6) Usui T, Soda K, Tomioka Y, Ito H, Yabuta T, Takakuwa H, Otsuki K, Ito T, and Yamaguchi T: Characterization of clade 2.3.4.4 H5N8 highly pathogenic avian influenza viruses from wild birds possessing atypical hemagglutinin polybasic cleavage sites. *Virus Genes*, 53(1), 44-51, 2017.

7) Kobayashi M, Kodama M, Noshi T, Yoshida R, Kanazu T, Nomura N, Soda K, Isoda N, Okamatsu M, Sakoda Y, Yamano Y, Sato A, and Kida H: Therapeutic efficacy of peramivir against H5N1 highly pathogenic avian influenza viruses harboring the neuraminidase H275Y mutation. *Antiviral Res*, 139, 41-48, 2017.

総 説

1) 伊藤壽啓: 米国, 欧州を含む世界の鳥インフルエンザの発生状況. *鶏病研究会報* (増刊号), 1-6, 2016 年.

2) 中村進一, 花田郁実, 水主川剛賢, 村上翔輝, 曾田公輔, 岡谷友三アレシヤンドレ, 常盤俊大: 動物園・水族館における疾病診断のためのサンプリングを考える. *日本野生動医学会誌*, 22(2), 25-30, 2016 年.

学会発表

1) Soda K, Ung THT, Hotta K, Nguyen LKH, Ito H, Le QM, Yamashiro T, and Ito T: Avian Influenza Virus Surveillance. Symposium "Researches on infectious diseases in Vietnam and their application to the improvement of diagnosis, prevention and treatment", 2016 年 5 月 16 日, 長崎市.

2) 伊藤啓史, 利根壮一郎, 竹前喜洋, 西藤岳彦, 伊藤壽啓: 豚インフルエンザウイルス国内分離株の性状解析. 第 31 回中国四国ウイルス研究会, 2016 年 7 月, 鳥取市.

3) 笛吹達史, 富岡幸子, 曾田公輔, 伊藤啓史, 伊藤壽啓, 山口剛士: 高病原性鳥インフルエンザ国内発生においてチョウセンイタチ (*Mustela sibirica*) は家禽への感染源になりえる. 第 31 回中国四国ウイルス研究会, 2016 年 7 月 10 日, 鳥取市.

4) Soda K, Ung THT, Hotta K, Le QM, Yamashiro T, and Ito T: Antigenic and genetic analyses of novel clade 2.3.4.4 H5 highly pathogenic avian influenza viruses isolated in Japan and Vietnam. Options IX for the Control of Influenza, 2016 年 8 月 27 日, Chicago, U.S.

5) 橋口未迪, 寸田祐嗣, 曾田公輔, 森田剛仁: インフルエンザウイルス(H3N2)のマウス嗅神経細胞への感染とその中枢神経系への影響に関する実験病理学的研究. 第 159 回日本獣医学会学術集会, 2016 年 9 月 6 日, 藤沢市.

6) 曾田公輔, Ung Thi Hong Trang, Nguyen Le Khanh Hang, 伊藤啓史, Le Quynh Mai, 伊藤壽啓: ベトナムの家禽における H5 亜型高病原性鳥インフルエンザウイルス流行株の変化. 第 159 回日本獣医学会学術集会, 2016 年 9 月 7 日, 藤沢市.

7) 仲村望, 曾田公輔, Ung Thi Hong Trang, Nguyen Le Khanh Hang, 伊藤啓史, Le Quynh Mai, 伊藤壽啓: ベトナムの家禽の H5 亜型高病原性鳥インフルエンザウイルス(HPAIV)に対する抗体保有状況. 第 159 回日本獣医学会学術集会, 2016 年 9 月 7 日, 藤沢市.

8) 笛吹達史, 富岡幸子, 曾田公輔, 伊藤啓史, 伊藤壽啓, 山口剛士: 高病原性鳥インフルエンザ国内発生におけるチョウセンイタチ (*Mustela sibirica*) の家禽への感染源としての可能性, 第 159 回日本獣医学会学術集会, 2016 年 9 月 7 日, 藤沢市.

9) 竹前喜洋, 常国良太, 伊藤壽啓, 西藤岳彦: ネブライザによる豚インフルエンザウイルスの豚への投与方法. 第 159 回日本獣医学会, 2016 年 9 月, 藤沢市.

10) 曾田公輔: ウイルス病を確定診断する機関が望むこと. 第 22 回日本野生動物医学会大会, 2016 年 9 月 17 日, 宮崎市.

11) Nakamura N, Soda K, Ung THT, Nguyen LKH, Ito H, Le QM and Ito T: Serological Surveillance of Highly Pathogenic Avian Influenza in Domestic Poultry in Vietnam. The 64th annual meeting of the Japanese Society for Virology, 2016 年 10 月 24 日, 札幌市.

12) 伊藤壽啓: 米国、欧州を含む世界の鳥インフルエンザの発生状況. 平成 28 年度秋季全国鶏病技術研修会, 2016 年 10 月, 奈良市.

13) Soda K, Ung THT, Nguyen LKH, Ito H, Le QM, and Ito T: Antigenic and genetic analyses of novel clade 2.3.4.4 H5 highly pathogenic avian influenza viruses isolated in Japan and Vietnam. International Symposium in Veterinary Science Strengthening the Collaboration between Indonesia and Japanese Veterinary School (closed), 2017 年 1 月 19 日, Bogor, Indonesia.

4. その他の研究活動

(1) 国際共同研究・共同調査

1) 国際乾燥地研究教育機構、2017 年 2 月 15 日～18 日、農業・農村開発プロジェクト（獣医・畜産グループによる現地視察ならびに共通課題の探索、サルモネラの疫学研究実施打合せ）、タイ王国・コーンケン大学

2) 文部科学省「感染症研究国際展開戦略プログラム～ベトナムにおける感染症制御研究・開発プロジェクト」平成 27 年～平成 32 年「ベトナムにおける包括的な鳥インフルエンザ研究」ベトナム社会主義共和国

5. 広報活動

(1) パンフレット等

鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター: パンフレット改訂版作成(平成 28 年 6 月)

(2)講演等

- 1) 大槻公一：地球規模で広がっている鳥インフルエンザの被害ーヒトへの脅威は増しているか。京都産業大学むすびわざ講座, 2016年4月23日, 京都市.
- 2) 山口剛士：野生動物による高病原性鳥インフルエンザウイルス伝播の可能性。佐賀県鶏病研究会支部研修会, 2016年6月2日, 佐賀市.
- 3) 大槻公一：国内外における鳥インフルエンザの発生状況と最新の知見について。鶏病研究会滋賀県支部 平成28年度近畿地区鶏病技術研修会, 2016年9月29日, 守山市.
- 4) 山口剛士：農場周辺の野生動物についてー農場内への侵入実態と高病原性鳥インフルエンザウイルス伝播の可能性ー。農研機構シンポジウム, 2016年9月29日, 東京都千代田区.
- 5) 山口剛士：野生動物の農場内侵入実態と高病原性鳥インフルエンザウイルス伝播の可能性。農林水産省家畜衛生研修会, 2016年10月25日, つくば市.
- 6) 山口剛士：野生動物による高病原性鳥インフルエンザウイルス伝播の可能性。秋期全国鶏病技術研修会, 2016年10月28日, 奈良市.
- 7) 山口剛士：高病原性鳥インフルエンザウイルスの野生動物による伝播の可能性と低温下での消毒効果。鶏病研究会兵庫県支部技術研修会講演, 2016年10月31日, 姫路市.
- 8) 笛吹達史：「高病原性鳥インフルエンザに関する最近の知見」。宮崎大学テニユアトラック推進機構主催セミナー「重要家畜伝染病の発生と畜産への影響」, 2016年11月10日, 宮崎市.
- 9) 山口剛士：高病原性鳥インフルエンザウイルスの野生動物による伝播の可能性と低温下での消毒効果。豊橋市畜産防疫対策協議会鳥インフルエンザ対策研修会講演, 2016年11月15日, 豊橋市.
- 10) 大槻公一：最近の鳥インフルエンザの現状。一般社団法人大阪府畜産会自衛防疫研修会, 2016年11月17日, 大阪市.

- 11) 村瀬敏之: 鶏の大腸菌症について. 香川県養鶏協会・養鶏研修会, 2017年1月28日, 琴平町.
- 12) 大槻公一: 国内各地で発生している鳥インフルエンザについて. 徳島県危機管理部県民くらし安全局 平成28年度徳島県食鳥処理衛生管理者研修会及び徳島県食鳥処理場 HACCP 推進協議会研修会, 2017年2月8日, 徳島市.
- 13) 山口剛士: 野生動物の農場内侵入実態と高病原性鳥インフルエンザウイルス伝播の可能性. 鶏病研究会千葉県支部技術研修会講演, 2017年2月10日, 成田市.
- 14) 大槻公一: 高病原性鳥インフルエンザの発生状況について. 京都府畜産技術連盟京都府ブロイラー銘柄化推進研究会, 2017年2月21日, 京都市.
- 15) 山口剛士: 高病原性鳥インフルエンザの流行状況と防疫対策. 鳥取県獣医師会講演, 2017年3月15日, 倉吉市.
- 16) 山口剛士: 高病原性鳥インフルエンザウイルスの家ねずみおよび野生動物による伝播の可能性. ねずみ駆除協議会講演, 2017年3月16日, 東京都千代田区.

(3)新聞雑誌等掲載

- H28.11.21 鳥取と秋田は高病原性鳥インフル 環境省 共同通信, 産経, 中日
- H28.11.21 秋田、鳥取で鳥インフル＝動物園の死骸などから — 環境省
時事ドットコム
- H28.11.22 鳥インフルエンザ検出 県、波及ないよう監視
84の養鶏場調査、異常なし／鳥取
(鳥取大学農学部山口剛士教授(獣医衛生学)) 毎日
- H28.11.22 鳥取で鳥インフル検出 環境省、警戒レベル最高に 高病原性
(鳥取大学農学部山口剛士教授(獣医衛生学)) 日本海
- H28.11.22 鳥インフルウイルス検出 山陰中央, 朝日, 読売
- H28.11.23 フクロウも鳥インフルか 秋田市大森山動物園 日刊スポーツ

- H28.11.23 フクロウも鳥インフルか 秋田の動物園 産経
- H28.11.23 秋田フクロウ鳥インフルか 盛岡のオオハクチョウも
共同通信, 山陰中央, 長崎, 福井, 千葉
- H28.11.24 鳥インフル シロフクロウも陽性・・・大森山動物園
(鳥取大伊藤壽啓教授(獣医公衆衛生学))
(鳥取大山口剛土教授(獣医衛生学)) 読売
- H28.11.24 鳥インフル 環境省緊急調査チームが現地調査 日本海
- H28.11.24 鳥取、高病原性鳥インフル検出 環境省チーム野鳥調査 日本海
- H28.11.24 検出 10 キロ圏内で環境省緊急調査 鳥インフルウイルス 朝日
- H28.11.26 <鳥インフル> 半径 10 キロ圏内に死んだ野鳥なし 河北
- H28.11.26 米子 水鳥公園 鳥インフル検出 コハクチョウ 2 羽から
10 キロ監視重点区域 山陰中央, 毎日
- H28.11.29 新たに高病原性検出 気高の鳥インフル 県内今季 3 例目 日本海
- H28.11.29 鳥取のインフル 3 検体から検出 山陰中央, 朝日, 毎日
- H28.11.30 鳥インフル コハクチョウから高病原性検出 鳥取・米子 毎日
- H28.11.30 鳥取・米子でも鳥インフル コハクチョウの死骸から検出 産経 WEST
- H28.11.30 鳥インフル対策強化 鳥取県 防護服追加購入など
(鳥取大農学部山口剛土教授) 日本海
- H28.11.30 新潟、青森 32 万羽処分 高病原性鳥インフル検出
拡大防止、政府全力
防疫体制強化を 大槻公一鳥取大学特任教授の話 日本海
- H28.11.30 鳥インフル対策強化 日本海, 読売
- H28.12. 1 鳥インフル 米子でも高病原性 水鳥公園 コハクチョウから検出
日本海
- H28.12. 4 安曇野の野鳥、鳥インフルか 県が遺伝子検査 信濃毎日
- H28.12. 6 動植物園で鳥インフルの疑い 飼育のコクチョウ 名古屋 朝日
- H28.12. 7 名古屋で鳥インフルか 東山動植物園のコクチョウ
共同通信, 山陰中央

H28.12. 8	鳥インフル拡大 全国で展示中止相次ぐ 名古屋 東山動物園でも陽性	日本海
H28.12. 8	鳥インフル 全国で猛威 教訓生かし防疫対策	山陰中央
H28.12.10	鳥インフル 鳥大・山口教授に聞く 自然界にまん延可能性 来年 5 月まで警戒必要	日本海
H28.12.13	東山動植物園 鳥インフルエンザ「高病原性」	読売
H28.12.13	絶滅危惧種のガンも陽性 鳥インフル、名古屋・東山動物園	産経 WEST
H28.12.13	絶滅危惧種も鳥インフル陽性反応・・・東山動植物園	読売
H28.12.13	鳥インフル 3羽が確定 愛知・東山動植物園のkokochow	日本海
H28.12.14	鳥インフル脅威 動物園も 秋田で発生 飼育鳥を殺処分 (鳥取大伊藤壽啓教授)	朝日
H28.12.16	鳥インフル 5月頃まで注意	読売
H28.12.21	三重 鳥インフル確定	読売
H28.12.21	宮崎鳥インフル危惧 野鳥の侵入防止対策徹底を確認 鳥取県が連絡会議 (鳥取大農学部山口剛士教授(獣医衛生学))	日本海
H29.12.21	鳥インフル 異常なし 県が連絡会議 養鶏場 84 か所聞き取り	読売
H29.12.29	県が連絡会議 点検監視を継続 熊本県インフル受け (鳥取大農学部伊藤壽啓教授)	日本海
H29. 1. 4	死んだ野鳥から鳥インフル陽性 愛知	日本海
H29. 1. 5	死骸見つけたら連絡 豊橋など鳥インフル陽性 注意点は (鳥取大山口剛士教授)	中日
H29. 1.10	山口で野鳥からインフル陽性	日本海
H28. 1.12	野鳥 1羽から鳥インフル 島根・浜田	日本海
H28. 1.15	岐阜で鳥インフルか 養鶏場 簡易検査で陽性反応	日本海
H28. 1.26	鳥インフル対策 消毒など徹底を 県会議、積雪対応確認	読売
H29. 1.31	清水などの高病原性 韓国ウイルスと同一 農水省、遺伝子解析 (伊藤壽啓鳥取大教授)	北海道

- H29. 2. 2 鳥インフル動物媒介？ 鶏舎内への侵入確認 鳥取大調査
(鳥取大山口剛士教授(獣医衛生学)) 毎日
- H29. 2.24 お宅の鶏舎も危険いっぱい 侵入の様子撮影 防除意識向上に
伝染病運ぶ動物次々・・・ (鳥取大学山口剛士教授) 日本農業
- H29. 3.25 鳥インフル対策を強化 県が連絡会議
(鳥取大農学部山口剛士教授) 日本海

(4)TV取材出演等

- H28.11.22 高病原性の鳥インフルエンザウイルス検出 山陰放送
- H28.11.29 鳥インフル 防疫の徹底を確認 (鳥取大学山口剛士教授) NHK
- H28.12. 3 テレ朝 news また鳥インフル 水戸市でも オオハクチョウから
テレビ朝日

6. 社会貢献

- 伊藤壽啓: 平成 9 年度～現在 鳥取県公衆衛生協会理事
- 伊藤壽啓: 平成 19 年度～現在 農林水産省食料・農業・農村政策審議会家畜衛生
部会家さん疾病小委員会委員長
- 伊藤壽啓: 平成 20 年度～現在 鳥取県防災危機管理委員会委員
- 伊藤壽啓: 平成 21 年度～現在 農林水産省高病原性鳥インフルエンザ疫学調査
チーム座長
- 伊藤壽啓: 平成 21 年度～現在 とっとり防災危機管理研究会メンバー
- 伊藤壽啓: 平成 21 年度～現在 鳥取県新型インフルエンザ対策本部会議顧問
- 伊藤壽啓: 平成 21 年度～現在 鳥取県環境衛生研究所研究評価委員
- 伊藤壽啓: 平成 22 年度～現在 鳥取県食の安全推進委員会委員長
- 伊藤壽啓: 平成 22 年度～現在 農林水産省動物用インフルエンザワクチン国内
製造用株選定委員会委員

伊藤壽啓: 平成 23 年度～現在 農林水産省食料・農業・農村政策審議会家畜衛生部会臨時委員

山口剛士: 平成 23 年度～現在 日本獣医師会野生動物対策検討委員会副委員長

山口剛士: 平成 23 年度～現在 鶏病研究会専門委員会委員

山口剛士: 平成 25 年度～現在 環境省鳥インフルエンザ等野鳥に係る専門家グループ会合メンバー

山口剛士: 平成 25 年度～現在 鳥取県食の安全推進会議座長

山口剛士: 平成 25 年度～現在 鳥取県防災顧問

山口剛士: 平成 28 年度 兵庫県立コウノトリの郷公園高病原性鳥インフルエンザ対策会議

山口剛士: 平成 28 年度 農林水産省鳥インフルエンザ疫学調査チーム

山口剛士: 平成 28 年度 環境省動物園等の高病原性鳥インフルエンザヒアリング会議

村瀬敏之: 平成 20 年度～現在 鳥取県公衆衛生協会理事

村瀬敏之: 平成 27 年度～現在 鳥取県獣医師会監事

村瀬敏之: 平成 27 年度～現在 特定非営利活動法人獣医系大学間獣医学教育支援機構幹事

村瀬敏之: 平成 28 年度 鳥取県感染症対策協議会委員

尾崎弘一: 平成 25 年度～現在 日本獣医師会微生物学分科会シンポジウム委員

伊藤啓史: 平成 26 年度～現在 日本獣医学会評議委員

伊藤啓史: 平成 26 年度～現在 鳥取県環境審議会委員

伊藤啓史: 平成 26 年度～現在 環境省鳥インフルエンザウイルスのモニタリング調査

大槻公一: 平成 4 年度～現在 鳥取県食鳥肉衛生協会理事

大槻公一: 平成 9 年度～現在 鶏病研究会 理事

大槻公一：平成 16 年度～現在 京都府高病原性鳥インフルエンザ対策専門家
会議委員

大槻公一：平成 18 年度～現在 京都府・京都市新型インフルエンザ対策専門家
会議委員

大槻公一：平成 18 年度～現在 京都府広域防疫対策センターに係る専門家チーム
委員

大槻公一：平成 23 年度～現在 近畿ブロック家畜病性鑑定ネットワーク協議会委員

大槻公一：平成 24 年度～現在 農林水産省 農林水産業・食品産業科学研究推進
事業(実用技術開発ステージ) 審査専門評価委員

鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター：平成 20 年度～現在 環境省野鳥に
おける高病原性鳥インフルエンザに係る検査

鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター：平成 28 年度 農林水産省家禽農場に
おける高病原性鳥インフルエンザに係る検査 (H5N6 9 道県 12 農場)

鳥取大学農学部附属鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター一年報 第10号
(2016年版)

発 行 日 平成29年4月1日

編 集 ・ 発 行 国立大学法人鳥取大学農学部附属
鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター
〒680-8553
鳥取市湖山町南4丁目101番地
(代表者) センター長 伊藤 壽啓
Tel. & Fax. 0857-31-5437

印 刷 中央印刷株式会社
〒689-1121
鳥取市南栄町34番地
Tel. 0857-53-2221 Fax. 0857-53-2201
